大杉谷（金谷，沢木，名取，小野，古木，佐藤）　佐藤

3日目の朝，ついに降りつづいていた雨も止み，宮川ダム三杉旅館に足止めをくらっていた私たちも，主要目的の大杉谷へ向かうことが決った。中年の夫人が1人で経営する旅館は，私たち6人だけが泊っているだけで，それも半分雨にいじけていたので，陰気なものでした。旅に出てまで，1日中ふとんの中で，2人でやるというのもかったるいものでした。5目並べと将棋です。夜は，階級闘争が続きました。そんな私たち全員が，大杉谷へ向かえないのは残念でした。1人大杉谷と反対方向へ，振り向きもせず，さみしそうにペダルを踏む先輩の後ろ姿が，大杉谷へ向う5人とは，対照的でした。

巻電所に自転車を乗り置いて，登山口へ来たころには，もう暑いと思うくらいのいい天気で，川の中の石も1つ1つ数えることができるほど澄み，この暖かさに冬眠から出てきたばかりのヘびも，まだ登山する人が少ないと思っていたのに，若いええ男が5人も山を荒らしに来たのを迷惑に思ったにちがいない。雨あがりの山の緑というのは，実にあざやかです。写真にも，緑のあざやかさに負けじと，春のまだ決して強いとはいえない太陽が，せいいっぱい光り輝いているのがはっきり写っています。道は，巾が50cmあるかというくらいで，下は木もろくに生えれないがけで足をはずしたら川の中へドボンという所もありました。それで，まだやりたいことがぼくにはあるんです。「私たちは，この場所

で，東工大生佐藤君を，(不)運にも失ないました。安らかに眠ってください」，なんてことにはなるまいと思いました。決して，決して1人では。少なくとも1人は道づれをと心に宣いました。道の途中には，足もと注意と書いてあり，足もとを注意していくと必然的に，頭上に横から生えている木にぶつかるんです。

その日の宿泊予定地である桃の木小屋では，歯の抜けたこの苦響の中でいかにして生きてきたかを物語るような顔をした老婆と，ねこが出迎えてくれました。登ってくる時，すれ違った唯一の老人と，2人で生活しているらしい。ここしばらく，まあ女らしい女には出合っていなかったが，私たちが着いて2時間くらいして明らかに老婆の声ではない女の声がした時には，屋間からふとんの中へ入っていた私たち全員が起き上りました。その2人づれの女性が，旅行かばんを持って登ってきたのには少々びっくりしました。この山小屋は，まだ夏の準備ができていなくて，電気もなく，夕食のおかずもかんづめだけでした。夕食のあと，すぐ風呂へ入りました。まっ暗いもみじの枯れ葉の浮いている風呂へ2人で入りました。東京にはないものです。そのあと再び登ってきたらしい老人が，ぼくらが出る時持ってきたロウソクのかすかに揺れる中で，2人の女性の白いむりっとした裸体が触れあい，せっけんにまみれた2人の体がもつれるのを想像するとむらっときました。そこには，女性2人の他に，大阪の小学校の教員が1人泊りました。

次の朝は，前の晩老婆が言っていたように快晴だったのは，長年の経験と感心しました。私たちが朝食をしていました。ぼくは，窓ぎわに席っていました。そこからSは，L字型になっている小屋の寝室が見え，ななんと，カーテンの横にカーテンの色とは異った色の何かが見えるんです・そうです，カーテンからSはみ出したオレンジ色の模様の入ったパンツなんです。食事も何を食べたか，よくわかりませんでした。みんなには，じっくり楽しんでから教えてあげました。大台ヶ原へは，偶然(?)に，その2人といっしょに行くことになりました・でも私には，不満でした。私は，前から2番目で，男のけつしか見えず，男のけつなんか見てもねっからおもしろくない。でも，先輩に，しりが見たいので後ろにしてくださいとも言えず，あれで大杉谷のよさが減りました。大台ヶ原の途中にある日出ヶ岳の山頂に近ずくにつれて，雪が多い所で40cmくらいあり，シャクナゲの弱々しい枝がそこから芽を出しているのなんかそっちのけで，後ろへ行きたかった。ガサガサという音，一瞬足が止まり，次の瞬間しかが雪の上を走っているのが目に入りました。ここでは，春はもう少し先のようです。日出ヶ岳の山頂は，日本一の多雨地帯で雨量計が三重県と，奈良県の2つ設置してあり，四方見渡せるんですが視界はあまりよくありました。写真を撮ったんですが，いいんでしょうか。とるな，すてるな，みんなの大台と書いてあったのに。日出ヶ谷で昼食後，大台ヶ原の山荘へは雪の道30分ほどであった。